

『サイラス・マーナー』における貨幣と病

谷田 恵司

1 序

本論は、イギリス社会が農業国家から産業革命を経て工業中心の近代資本主義社会へと変貌してゆく動きが始まりつつある時代背景をふまえた上で、貨幣と病という二つの視点から『サイラス・マーナー』(1861年)を読み解こうとする試みである。最初に作品中で主人公と貨幣とのつながりを最も端的に示していると思われる場面を検討してみよう。機織り職人サイラス・マーナーは友人に裏切られて盗人の汚名を着せられ、婚約者まで奪われる。彼は町を離れて小さな村で人間嫌いの孤独な男としてこつこつと働き、そうして蓄えた金貨を毎夜数えることを唯一無二の喜びとして生きている。

But at night came his revelry: at night he closed his shutters, and made fast his doors, and drew forth his gold. Long ago the heap of coins had become too large for the iron pot to hold them, and he had made for them two thick leather bags, which wasted no room in their resting-place, but lent themselves flexibly to every corner. How the guineas shone as they came pouring out of the dark leather mouths! [...] He spread them out in heaps and bathed his hands in them; then he counted them and set them up in regular piles, and felt their rounded outline between his thumb and fingers....¹⁾

ここでは、金貨は単なる通貨であることをやめ、持ち主を虜にする愛玩物あるいは崇拜の対象とまでなっている様子が実に生々しく描かれている。物がその元来持っている基本的属性を越えてその持ち主を魅了する。それを性的であ

ると見ることもさへもあながち行き過ぎた解釈とも言えないだろう²⁾。本論では、金貨とサイラスの関係を、まず貨幣と人間との関係という基本から確認することを出発点としたい。その上で、その関係を貨幣の物神化であると見て、貨幣としての基本的機能を奪われた金貨と、その金貨と交換されたかのように現れた娘との類似性を、経済的側面を中心にして考えることからこの作品の検討を始めた。

2 貨幣

話を進める前にここで貨幣の機能を確認してみよう。貨幣とは何か、ということになるとそれは「太古から今日まで、貨幣について論じる多くのひとびとを色恋以上に迷わせたのは、まさにこの『貨幣とは何か?』という問いにほかならない」³⁾と言われるほど複雑な問題である。しかしここでは一応の目安として、いくつかの経済学辞典など⁴⁾を参照したうえで、以下のような機能を中心に考えていきたい。それは、基本的機能としての価値尺度機能と流通手段機能、そして付随的なものとしての価値貯蔵機能の3つである。

さて、サイラスが前掲の場面で愛玩していた金貨が、上記のどのような機能を果たしているかを考えてみよう。商品の流通手段という機能に関しては、彼はそれを使って何かほかの商品を手に入れようとはしていないから、その機能は失われていると考えられる。金貨は毎夜数えられるが、他の品物やサービスとの交換を前提にした計量ではないから、それは流通の現場から引退して、商品交換の媒介たる役割を止めている。では価値尺度としての機能はどうか。彼の蓄積した272ポンド12シリング6ペンスは、たとえばその量によって自分が働いた年月を数える目安とするとか、あるいはそれで狩に使う良い馬が三頭買えるだけの金であるとか、そういう、他のものの価値をはかる物差しとなる金額として存在してはいない。彼の金貨は価値尺度としての機能をも喪失しているといえよう。

サイラスの金貨は通貨としての流通をやめ、単に収集の目的となって死蔵された黄金である（正確に言えば、彼の革袋の中にはギニー金貨以外の貨幣も混

じっている）。では彼の蓄銭行為は価値貯蔵手段としての貨幣の機能を生かしていると言えるだろうか。彼はその金貨の価値を保存し、将来に向けて、たとえば自分の老後に備えよう、という考えをいじめて金貨を蓄えているのではない。蓄銭それ自体が目的となっている。Sandra Gilbert はこう考える。“His obsessive hording, in which gold is drained of all economic signification, reduces the currency of society to absurdity, further emphasizing his alienation.”⁵⁾ しかしここでは、通貨の機能破綻が「彼の疎外をさらに深める」というよりも、むしろサイラスは通貨の機能を完全に破綻させることはできず、貨幣の貨幣たる魔力の最たるものである物神化が起こり、それが逆に金貨とサイラスの関係をダイナミックに変質させて行くのだ。

もともと、貨幣の属性は社会の中の関係性において生じる。しかし、その過程において貨幣がその金属の持つ本来の属性をはるかに越えた性質を持ち始める場合がある。その性質があたかもその貨幣の本来の属性であるかのように扱われると、その時貨幣は物神性を持つと言われる。サイラスが長年使っていた水がめが壊れたとき、“The brown pot could never be of use to him any more, but he stuck the bits together and propped the ruin in its old place for a memorial.” (21) という記述がある。ここでも、孤独な人間が物に命を吹き込み、無意識に身近なぬくもりを求めるかのような物神化がみられる。しかし、金貨は壊れた水がめとは異なり、ギルバートが言うように第一義的には社会的通貨である。その社会性を抑圧し続けることは難しい。それが物神性を持ったときには、たとえば盗難を招くという形となってその魔力を発揮するのである。

3 盗難

ある晩、サイラスは翌朝の仕事に必要な糸の手持ちがなくなっていることに気付く。こうして、ダNSTANがサイラスの小屋にやって来たとき、そこが無人でしかも鍵がかかっていなかったのは、サイラスがすぐに戻るから大丈夫だと思って、戸口に鍵をかけずに商売用の糸を仕入れに出かけていたからである。盗難は持ち主が経済活動に従事しているさなかに起こったのだ。サイラスはラ

ンタン・ヤードの事件以来人間不信となり、少なくともいわゆる人間的、感情的な交流という意味においては、他の人間との交わりを止めた人間である。彼は村の教会にも行かず、酒場で村人たちと言葉を交わしたりすることもない。しかし、そうした孤立した人間である彼も機織り職人としては、注文を受けて糸を買い、それを布に仕上げて注文主に届け、その代価を受け取ることで村の社会経済の一端を担っている。その点では彼の経済活動は十分社会性を持つ。だが、その経済活動によって彼の手もとに蓄積された貨幣は彼の小屋で死蔵され、社会の通貨循環の過程から離脱させられている。

マイダス王は手に触れるものすべてを黄金に変え、食物のような日常の品物すらその属性を奪った。サイラスの手は金貨からその通貨としての属性を奪ったのである。しかし、貨幣の持つ、経済活動の中心となつて、交換を媒介する、あるいは他の品物やサービスとの交換を求める性質をこの守銭奴は抑制し続けることはできなかった。彼の金貨が盗まれるのは、いわば金貨が自ら流通の場への復帰を望み、ダンスタンという盗人の手と呼び寄せたのだとも言えよう。物神性を持った金貨は所有者たる守銭奴の抑圧をふりほどこうと、自らの流通市場への復帰を願う性質を強烈に発散することで、盗人をサイラスの小屋に招き、その力を借りて脱出を試みたのである。

馬を死なせてしまったダンスタンは、夕霧の中を歩いて家に帰ろうとしている。

He must soon, he thought, be getting near the opening at the Stone-pits: he should find it out by the break in the hedgerow. He found it out, however, by another circumstance which he had not expected — namely, by certain gleams of light, which he presently guessed to proceed from Silas Marner's cottage. That cottage and the money hidden within it had been in his mind continually during his walk. (37)

マーナーが夜ごとの金貨の饗宴で “How the guineas shone as they came pouring out of the dark leather mouths!” (21) と思うとき、彼はその黄金の光の虜になっている。それと同様に、上記の “certain gleams of light, which he presently guessed

to proceed from Silas Marner's cottage” は、社会的通貨として交換の媒介の場に再び躍り出ることを求め、救出の手を招いている金貨の輝きなのである。金貨はレンガの下の革袋の中にあっても、その光は小屋の外に漏れ出し、欲望に目のくらんだ人間を招き寄せる。単に社会的関係の上にもみ成立しているはずの、貨幣が交換の場に立ちたいと求める力は、あたかも金貨それ自体の属性であるかのように振る舞っている。これこそ物神化の究極の姿である。一見のどかな田園風景と思われるラビロー村にも、たびたび言及される戦争景気の影響⁶⁾とともに、資本主義の理念はすでに十分浸透しているのだ。

4 金貨と金髪

サイラスは金貨盗難の後、大晦日の晩に発作に襲われ、小屋の入り口の戸を閉めかけたまま意識を失う。そして意識が回復したとき、彼の近眼の目に金色の塊が見える。

Gold! — his own gold — brought back to him as mysteriously as it had been taken away! He felt his heart begin to beat violently, and for a few moments he was unable to stretch out his hand and grasp the restored treasure. The heap of gold seemed to glow and get larger beneath his agitated gaze. He leaned forward at last, and stretched forth his hand; but instead of the hard coin with the familiar resisting outline, his fingers encountered soft warm curls. (110)

ギルバートは、これは我が娘までも金に変えてしまったというマイダス王の物語の逆転であると述べ、さらに次のように言う。“To make way for Eppie, who is his gold made meaningful, Silas must first, of course, be separated from his meaningless gold.”⁷⁾ それではここで金貨と子供の類似性を、経済的側面を中心にして考えてみよう。金貨は貨幣として前述のように主に価値尺度・流通手段・価値貯蔵手段の3つの機能を持つ。それに対して、子供というものはどう規定できるだろうか。ギルバートはサイラスとエビーの関係を文化人類学的観点から見た父

親と娘の関係ととらえ、次のように述べる。

she [a daughter] is a treasure, a gift the father is given so that he can give it to others, thereby weaving himself into the texture of society. To put the matter in a Lévi-Straussian way, she is the currency whose exchange constitutes society.⁸⁾

しかし、一般的には娘は金貨とは異なり、交換の媒介をするのではなく、彼女自身の持つ属性つまり生身の女性としての、料理をしたり子供を生んだり育てたりなどという機能を求められて、他の家族の男性の妻となる。貨幣も確かに交換の場に登場するが、貨幣自体は物質としては何の役にも立たない金属のかけらに過ぎない。特に金貨以外の銅貨などの場合は希少性すらなく、その価値はあくまで次の交換相手がそれを価値あるものとして受け取る可能性にある。食べることも道具として使うこともできない単なる金属に、サイラスは自分の孤独な生活を支える物神性を与えて収集し愛玩した。これに対して、エビーという娘はサイラスにとってどのような意味があるのか。エビーは何を媒介し何と交換されるのか。

子供という存在の一般的な機能としては、未来を創造する担い手である、という点があるだろう。親にとって子育ては未来への投資とも言える。これは単なる通貨ではなく、資本となって価値創造の場に立ちあう資金でなくては果たせない機能である。さらに、交換の媒介という点で考えると、エビーはサイラスと村人たちの精神的交流をもたらす。それまでこの変り者の機織り職人を恐れていた子供たちですら、

No child was afraid of approaching Silas when Eppie was near him: there was no repulsion around him now, either for young or old; for the little child had come to link him once more with the whole world. (130)

この点を David Carroll は “It is through love’s mediation that Silas begins to gain possession of his life along with that of the community.”⁹⁾ と述べている。エビーはまず第一に媒介者なのである。

さらに、エビーとエアロンとの結婚でサイラスは具体的に何を手に入れると言えるだろうか。サイラスは娘を手放し、それと交換に何が彼の手元に来たのか。“You won’t be giving me away, father,” とエビーは教会に出かける前にサイラスに言う、“you’ll only be taking Aaron to be a son to you.” (181) と。しかし、結婚後は実際には彼女の愛情と家庭内労働は、その大半が夫に、そしてやがて生まれるだろう子供に注がれることになるだろう。けれど、サイラスにとっては家に男性がいることは、老後の安心につながる。つまりはサイラスは娘を独り占めする権利を手放し、今後働いて自分を支えてくれるだろう男性を我が家に迎えた。娘を、自分の老後の生活という将来のサービスと交換したと言えるだろう。これについて小池滋はこう語っている。

彼が近視眼で金貨と誤認した子供を育てたことは、いわば老後の保険として、老齢年金の支払いのように投資したことであり、これは経済的に賢明な投資であった。田園的で素朴な蓄銭が、自分を守る保険としての投資という都会的近代的なものと変化してゆく、これがこの小説のテーマである。¹⁰⁾

そもそも、サイラスは272ポンド12シリング6ペンスの貨幣でエビーを購入した、つまり、金貨と娘が交換されたのだと見なすこともできよう。カス家の次男ダンスタンがサイラスの金貨を盗み、その後長男ゴドフリーの隠し子がサイラスの家に来て、彼の娘となる。それでは、盗まれた金貨がサイラスの手に戻ることは、交換という観点から言えば、彼がエビーをカス家に戻さねばならないということになる。しかし、この交換は成立しない。ゴドフリーは何を差し出すのか。単に、生物学的父親であるという主張と、娘に経済的に不自由のない生活をさせるという保証だけではサイラスに対する交換条件としては不十分である。ゴドフリーが引き取るつもりでやって来た娘は、もう16年前の大みそかの晩にサイラスに抱かれていた幼な子ではない。その時のエビーはまだサイラスによって価値を与えられてはいなかった。しかし、16年間の親の愛情と手間ひまという価値をその存在の中に蓄積した（つまり、小池氏の言う「投資」を受けた）子供は、赤ん坊の時に比べてより大きな経済的価値を持っている。ゴドフリーが16年間、エビーの価値の増加に（ときおり、親切な地主として気

前のよいところを見せる以外には) 何の貢献もしていないのに対して、サイラスは愛情と労働とでエビーの価値を高め続けた。この娘はサイラスにとって失われた金貨に代わる価値貯蔵の機能を果たしたとも言えるだろう。

5 金貨の病

さて一方、ダンスタンはせっかくサイラスから奪った金貨を流通の場に持ち込むことができない。貨幣が物神化され、通貨から崇拜の対象にまで変化し、それがさらに流通の場への復帰を求めてダンスタンという盗人を招いた、という表現を続けるなら、なぜその窃盗の後、金貨はダンスタンによって浪費され貨幣本来の機能を発揮するという道を歩まず、まるでサイラスの小屋の床下で死蔵されていた状態に戻ろうとするかのように、ダンスタンの死体とともに16年間水底に眠ることになったのか。それは、金貨が守銭奴の病の呪縛を逃れられずに、その貨幣としての機能を、失われた貨幣と交換されたかのように出現する金髪の少女に移転させたのではないだろうか。

それではその病はどんなものだったのか。彼の病は“a mysterious rigidity and suspension of consciousness” (9) という言葉で語られ、“catalepsy” (110) という名がテキスト中にはっきりと記されている。この疾病は、ある精神医学事典では以下のように説明されている。

強硬症ともいわれ、緊張病症状候群の症状の一つである。患者は外部から一定の姿勢や四肢の位置を取られると、それを自ら変えようとはせず、長時間そのままの姿でいることをいう。これは、昏迷あるいは、亜昏迷状態において患者が能動性を失い、自発的行動ができない状態であり、疲労も感じない。[中略] 精神分裂病の緊張病症状候群においてその典型的な症状がみられるわけだが、脳炎、脳腫瘍などの脳器質性精神病、症候性精神病などでも出現することがある。また、ヒステリー、催眠状態においても同様な症状がみられ、これもカタレプシーと呼ばれている。¹¹⁾

ここでは彼の病を、単にサイラス個人にのみ影響を与える病としてではなく、その結果として生じる社会的あつれき、社会との摩擦、共同体の構成員としての存在が認められがなくなる状態も含んだ、社会的疾病という面に注目して論を進めたい。全ての病気が多かれ少なかれ社会的側面を持ち、特に精神病理学的疾病はそうした側面が強い。それは精神的な病はその患者の社会性を変化させるからである。生理的な病であるなら、単にその患者が社会的機能を一時的に果たせなくなるだけに過ぎず、また、その人間がたとえば入院していれば外の社会に出て他の人間との接触をすることは少ない。精神的疾病の場合は、普通に生活続けることはその病の程度によっては可能であり、特にサイラスのカタレプシーの場合は他人に危害を与えるような精神の異常というわけではない。なぜエリオットはこの作品でこうした発作を使ったか、という点について、Terence Cave はこう語る。“It is now generally accepted that in using catalepsy in this way George Eliot was exploring the problematic question of discontinuity in consciousness.”¹²⁾ ケイブはさらに、発作(意識喪失)はサイラスの“tenuous hold on continuous identity”¹³⁾ が表現されているのである、と見る。自己の連続性を喪失するということは、現実世界の時間と、自分の内面の時間との流れが全く食い違うことでもあろう。そうした食い違いがサイラスに共同体の構成員としての不安定な位置づけを与え、彼と失われた時間との関係を強調する。

サイラスの病が彼の意識を失わせ、その間に彼の人生における重大な事件が起こる、という状況が作品中で2回発生する。まず第一は、ランタン・ヤードでの病人看護の場面である。彼は意識を失い、その間の時間の感覚をなくした。それをウィリアムが利用し、彼を陥れた。サイラスは病で意識を失うとともに、その間の過ぎ去ってゆく時間をも失い、結果的に人間性への信頼も喪失したのだ。

もう一つは、小屋にエビーが迷い混んできた場面である。ここでは彼は意識を、すなわち時間を失ったからこそ、エビーが小屋に入るのを目撃せず、彼女が炉端に突然出現したと思い、この娘が彼の失った金貨に変わるものであると思ひ込むことができたのだ。また、彼の近視も、重大なものではないがいわば肉体的不具合であり、それがさらに金髪と金貨との混乱をまねいた。

彼が村から孤立していた15年という時間も、いわば、人間不信という社会的

疾病に犯され、共同体からの病気休暇を取っていた時間とも言える。その間彼は金貨を死蔵していただけでなく、自分の人間性をも死蔵していた。それを他の人間との共感関係に拡大することはできなかった。

ラビローは回復の場所としての田園であり、いわばサナトリウムとしての村でもある。『アダム・ビード』(1859)でのアーサー・ドニソンの、作品冒頭の負傷時と、結末での熱病からの回復期の二度にわたる帰郷も、癒す場所としての田園への帰還という側面を持っている¹⁴⁾。ではサイラスはラビロー村でどのように回復したのだろうか。彼は人づきあいをしない、人間不信の人物であるという、村人から見ると全くの変わり者という状態である上に、さらに、原因も治療法もまったく不明な、いわば神がかりのような奇病にとり付かれている。だが彼はそれが原因で村から差別されるわけではない。ジェム・ロドニーが発作の様子を見かけた時のように、彼の病はいわば彼という人格の一部として、不気味なものとして恐れられてはいるが一応受け入れられている。しかしまた、その病の不気味さが時には恐怖と無知により増大されることも事実である。

サイラスがまだ守銭奴の生活をしていたころ、彼は仕事に村の子供たちが邪魔をするのを嫌い、彼らをにらみつけた。すると子供たちは慌てて逃げ出したのだ。それは彼の“dreadful stare could dart cramp, or rickets, or a wry mouth at any boy who happened to be in the rear.”(6)と思われていたからである。もちろんそれは子供たちの恐怖と無知に基づく迷信であった。しかし彼の小屋の床下にある、毎夜彼に(性的とも見なせる熱狂で)愛玩された金貨は、物神として彼の生活を支配するとともに、逆に彼の人間嫌いとカタレプシーという二つの病の呪縛を受けた。ちょうど子供たちがサイラスの眼差しから自分たちの身体に呪いが降りかかると恐れたように。金貨はたとえ盗人の手で彼の小屋を抜け出しても、結局はその抑圧から逃れることができず、時の止まった世界に留まらざるをえなかったのだ。流通過程にあって時間の流れに乗っていてこそ貨幣はその機能を発揮する。時間の流れから切り離されたときには、それは単に死蔵された金属に過ぎない。かつてサイラスは金貨が増えて鉄の壺に入りきらなくなったとき、皮の袋に入れ替えたことがあった。しかし、堅い鉄の壺から抜け出し、冷たい床下からも脱出したかに見えた金貨も、守銭奴の病の呪縛を

抜け出すことはできなかった。彼の病の持つ、人との交流を行わず、また時間の流れに取り残されるという特質は彼の収集した金貨をも支配した。そしてその貨幣としての基本的機能は、金貨と交換されるかのように出現した少女に移っていったのである。

エビーこそ、共同体とこの周辺的存在との間に立つものとして、そして病による硬直状態に陥った心と身体を解きほぐす存在として、サイラスの社会的疾病を癒していくのだ。彼の病は、単に発作の際の症状だけではなく、孤独と偏執的蓄銭という、人格全体の含む問題として、いわば社会的疾病となって(ちょうど彼の住んでいる小屋が村外れにあるように)彼を共同体の周辺的存在としている。共同体との人間的接触をみずから絶ってしまった者であるサイラスが癒されるためには、媒介者が必要である。しかし彼の金貨はもちろんその役割を果たすことはできない。その金貨といわば強制的に交換されたエビーという生身の人間が媒介者として機能してゆくのである。

サイラスの失われた金貨が発見されるのは、ゴドフリーが土地改良を考え、排水にとりかかるのがきっかけである。父の老スクワイヤーのころはフランスとの戦争で景気は良かった。“there were several chiefs in Raveloe who could farm badly quite at their ease, drawing enough money from their bad farming, in those war times, to live in a rollicking fashion, and keep a jolly Christmas, Whitsun, and Easter tide.”(7)しかしやがてゴドフリーの代になるとそういうやり方にあぐらをかいているわけには行かなくなり、収穫量を増やすために排水を行うようになる。それは土地という生産手段の効率を高めることを目指す経済行為である。それがまさに呼び水となって、水底に眠る金貨の、貨幣として流通の現場への復帰を願う性質を呼び覚ましたのだ。

しかし16年後に水底から引き上げられた後も、その金貨はサイラスとエビーの小屋のテーブルの上に置かれた後、いったいどういう扱いを受けたのか明らかではない。ゴドフリーがそれを見て“*And that money on the table, after all, is but little. It won't go far.*”(167)と言うくらいである。(もちろん、ゴドフリーはエビーを引き取りやすくするために、わざとその金額を過小評価している。)おそらく利子で生活するか、それともその金が続くかぎりそれで暮らしていくか、どちらかにしたのだろうが、奇妙にもその後の金貨の行方は全く語られない。

それをエビーの結婚資金にしたという話題すらない。金貨の持っていた機能は、それが交換を求める性質であれ、物神化して崇拜や愛玩を求める性質であれ、サイラスの小屋を出て水底に沈んだときに消滅したのだ。それはエビーという娘に全面的に乗り移り、彼女こそ、交換を媒介し、投資を受け入れ、崇拜と愛玩を求め、最終的には金貨も、生物学的な父も、育ての父も、夫も、家も、すべてを独占する¹⁵⁾。だからこそ、この作品の結末は次のようなエビーの言葉で終わっているのだ。“What a pretty home ours is! I think nobody could be happier than we are.” (183)

サイラスは自らの人間不信とカタレプシーとの二重の病を金貨に感染させ、保有する金貨に物神性を与えながらも、その時間を奪い、交換や増殖の機会を与えなかった。サイラスの小屋を抜け出した後でさえも、金貨は呪縛から離れることはできず、空しく水底に沈んだ。金貨の持つ、交換を媒介し価値を蓄積する機能は、金貨と交代に現れた金髪の少女に転移した。こうしてエビーは、価値を増殖しすべてを独占する、近代社会における資本にも匹敵する属性を持った存在として、いやおうなしに押し寄せる資本主義社会の行く末を示しながらも、同時に、肉体的、精神的かつ社会的疾病を癒す、子供の姿をした“white-winged angel” (131) として、産業化と人間疎外の流れに対抗する人間的触れ合いの場に人を導くのである。ここに読者は、すべてを独占し増大してゆく資本という存在が、純真無垢な少女の姿と重なって現れる恐怖を感じ取ることができようし、また同時に、近代資本主義社会の負の側面を冷静に見つめながらも、それに立ち向かう力としての基本的人間性への信頼を持ち続けようとする意志をも見ることができるだろう。

注

本論は平成13年度東京家政大学海外研修派遣の成果の一部である。

- 1) *Silas Marner*, ed. David Carroll, Harmondsworth: Penguin Books, 1996, p. 21. 以下、本書からの引用はカッコ内にページ数のみを示す。
- 2) Jeff Nunokawa はこの個所から強烈な性的含意を読み取る。彼はこう語る。“The pleasure that Eliot’s miser takes in this illicit atmosphere...resembles a condensed catalogue of sexual deviance — incest, of course, ...but also the range of perversions that surrounds the “secret sin” of masturbation.” Jeff Nunokawa, “The Miser’s Two Bodies: *Silas Marner* and the Sexual Possibilities of the Commodity”, *Victorian Studies*, 36. 3, 1993, p. 274.
- 3) 岩井克人『貨幣論』築摩書房、1993、pp. 221–222。
- 4) 大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』（第3版）岩波書店、1992。金森・荒・森口編『有斐閣経済辞典』有斐閣、1988。宇野弘蔵『宇野弘像著作集』第一巻（経済原論Ⅰ）、岩波書店、1973などを参照。ちなみに、新村出編『広辞苑』第5版、岩波書店（1998）では以下のように定義されている。「商品交換の媒介物で、価値尺度・流通手段・価値貯蔵手段の3つの機能を持つもの。」
- 5) Sandra M. Gilbert, “Life’s Empty Pack: Notes Toward a Literary Daughteronomy”, *Critical Inquiry*, 11 (1985), p. 359.
- 6) Terence Cave によれば、“This is the period of the Napoleonic wars, when farmers had a relatively easy life because the price of grain was inflated by the absence of competition from abroad.” Terence Cave, “Introduction” in *Silas Marner*, ed. Terence Cave, (Oxford World’s Classics), Oxford: Oxford UP, 1996, p. viii.
- 7) Gilbert, p. 361.
- 8) Gilbert, p. 361.
- 9) David Carroll, “Introduction” in *Silas Marner*, ed. David Carroll, Harmondsworth: Penguin Books, 1996, p. xix.
- 10) 小池滋「*Silas Marner* 再評価」日本ジョージ・エリオット協会第3回全国

大会（1999年11月27日）での講演（引用者のメモに基づく）。

- 11) 加藤正明他編『新版精神医学辞典』弘文堂、1993。
- 12) Cave, pp. xvi - xvii.
- 13) Cave, p. xvii.
- 14) 谷田恵司『「アダム・ビード」における病』『英米文学』（立教大学）第62号（2002）、p. 143参照。
- 15) カス家の財産にしても、ゴドフリーが“I shall put it in my will.”とか“I must do what I can to make her happy in her own way.”（175）と妻に話していることから、子供のいないカス夫婦が世を去った後は、ある程度はエビーに渡るに違いない。

Money and Illness in *Silas Marner*

Keiji Yata

It is impossible to underestimate the importance of George Eliot as a novelist and social commentator in England's crucial transition from an agrarian to an industrial economy and *Silas Marner* is a particularly important text in this movement from feudalism to capitalism. This paper will offer a reading of this pivotal text in relation to Silas's gold and catalepsy arguing that within the confines of a moralistic fable the author explores the undercurrents and implications of significant historical ruptures and societal change.

When Silas imprisons his gold under the bricks in his cottage, he removes it from economic and social circulation, undercutting its utilitarian functions as a medium of exchange, a unit of account and a store of value, thus transforming it into a fetish, an object of blind worship. The gold, like Silas himself, is held in an artificial stasis, which cannot be sustained. Though emotionally withdrawn from the villagers, Silas cannot avoid having economic transactions with them and, similarly, the desire of the miser's disabled money to return to the world of commerce reveals itself, inviting Dunstan to free it from imprisonment, thereby revealing one of the typical phenomena of the capitalist society: a transformation of money, an everyday item, into something pseudo-divine and supernatural.

Though liberated, the gold is again imprisoned, hidden in the water for sixteen years and it is here that the correlation between the gold and catalepsy becomes visible. Eliot employs catalepsy, Terence Cave asserts, to explore the problematic question of discontinuity in consciousness. Just as this affliction robs Silas of consciousness it deprives the gold of its primary functions holding both in an uneasy temporal dislocation.

The paper concludes by examining how, even when it is recovered and returned, the functions of the gold are transferred onto Eppie who mediates relationships, calls for the

exchange, accepts investment, and finally monopolises all. Thus, it is possible to see how the contradictions of an all encroaching capitalism and the will to believe in the basic human relationships even in the face of this historical rupture are explored and held in an uneasy balance within the novel.